

シリーズ第2弾

「地域の福祉力 最前線」

— みんなが力を出し合う協働の場 —

地域での「生活のしづらさ」に気づき、共感し、
みんなで取り組む力ー地域の福祉力ーに注目する
シリーズ第2弾。

県内の地域福祉の“いま”をお伝えします。

前回は地域の福祉力が生まれる“きっかけ”が少なくなっている現状を踏まえ、「出会いの場」づくりについてお伝えしました。今回は、次のステップとして「協働の場」を取り上げます。「協働」「コラボ（コラボレーションの略）」…このところ、よく耳にする言葉ですが、福祉のまちづくりをすすめる上ではとても大切な考え方です。

「出会いの場」で育まれた「地域の福祉力」を発揮して、みんなが何かの役割を担いながら地域の課題に立ち向かう場、それが「協働の場」です。

社会福祉協議会(以下、社協)では、地域のみなさんが「出会い」「協働する」福祉のまちづくりを提唱しています。

今回は、下市町阿知賀地区の活動を通して
「協働の場」について考えます。

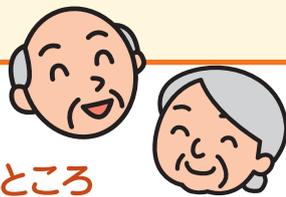


みんなが力を出し合う「協働の場」として、真っ先に頭に浮かぶのはサロン活動ではないでしょうか。県内では、社協が立ち上げにかかわっているだけでも6割以上の市町村域で小地域単位(大字などの歩いていける範囲)のサロンが展開されています。

閉じこもりがちな高齢者を対象に、身近で気軽に出かけられる場として住民が主体となって運営される高齢者向けサロンの他にも、子育てサロン、障害を抱える方のサロン、対象を問わず誰でもがくつろげるサロンなど多様な居場所づくりが進められています。

気軽に出会い交流することがサロンの主な目的ですが、実際には顔見知りになった参加者同士が、「相談しあったり」、「共通のこまり事に気づく」場にもなっています。お互いのちょっとした変化に「気づき」、何かあれば相談窓口につなぐことで、早期の問題解決につながることも多いと言われています。

心が許せるから
笑顔が違うんよ！



お～おきな声で笑えるところ

「あっはっは」「わーはっはっ」、入口に近づくとワイワイ・ガヤガヤとなんとも言えず楽しそうな声があふれる。

この日訪れたのは下市町の北東部に位置する阿知賀地区。14の垣内からなる人口1300人の地区、その3割(400人弱)が65歳以上の高齢者だ。2年前から開かれているサロンには、毎回30～40名ほどのお年寄りが集う。

「家ではあんまり笑うことないけど、ここに来たら、ねえ!」「ふだんはTV見ながらフフフ…、ここではおおきな声で笑えるなあ。免疫力もあがるって聞いたんよ。」この日は、地元の阿知賀幼稚園の子どもたちが遊びにきていた。遠くに暮らすひ孫と重なるのか、かわいい歌や踊り、ちょっとした仕草に目尻がさがる。



サロンが変えた日常のつながり

この日は、下市町の南端にある丹生地区のサロンサポーター一乾さんが、情報交換もかねて見学に。立ち上げ当初は、みんなの前で何かを話すことは想像もできなかった。一軒一軒、お年寄りの家を回りながら参加を募り、司会はふるえて声でできなかったという。だんだんとサロンが地域に馴染んできて、今では参加者ではない方から差し入れをいただくことも。高齢化の進む地域でサロンが必要とされている実感がある。

もともと地縁はあったが、サロンが始まってからのつながりはひと味違うようだ。「もちろんお互いに知り合いではあったんだけど…なんて言うかな…親しみがまして心が許せるようになった。笑顔が違うよ。」何よりも自分自身の人生が広がったように感じるという。



サロンを運営する皆さん

力を出し合う「協働」の可能性

彼女たちの「仲人役」である町社協の上村さんは、いつでも相談にのるし、無理は禁物と見守りながら、サポーターの人たちがそれぞれの地域に合わせて進化させていくサロンをそつと支えている。はじめは社協が応援に行っていたサロンが、だんだんと地元主導になるにつれ、不思議とみんなが協力しやすい雰囲気になっていくという。「私、お茶いれるわ」「この前の写真、ポスターにしてきたよ」「Aさんが来てないよ、忘れてるんかなあ、声かけてこようか」「Bさんはちょっと具合悪そうだったなあ、見に行こうか」参加者であるお年寄りたちも、できる範囲で力を出し合いながら支え合っている。

「自分が吸収したことは何かに役立たいし、誰かに伝えたい。取り次いでいくのが自分の役目、人生はgive&takeだから…」地域の福祉力は、楽しみながら支え合う人たちで成り立っている。

笑いあえる場を創る仕掛け人

この賑やかなサロンを切り盛りするのは、川北さん・南さん・小畠さん、3人の女性サポーター。地元の自治会や老人クラブ、そして民生委員さんに支えられながら、さまざまな工夫と心配りで笑いあえる場をつくっている。

健康体操やゲーム、懐かしい歌、四季折々のお楽しみ、暮らしに役立つ話、そしてちょっとした駄菓子をつまみながらほっこりするお茶のみ話。60代から90代という年齢の幅や得手不得手に気遣い工夫をしている。

例えば、的に向けてボールを転がすゲーム。紙コップを組み合わせたいびつな玉は、まっすぐにはいかない。「ここがみそ」と言う。誰がやっても失敗するボールなら、ひとりだけのを外して恥ずかしい思いをする人もいない。ちょっとした出来事で足が遠のく人を出さない工夫だ。

そんな工夫の源は、サロンの後のおしゃべり。「あのおばあちゃんは楽しんでくれたかな」「次はこんなことしてみようか」「新しい体操習ったんよ、やってみようか」お年寄りに元気をもらい、育ててもらっていると口をそろえ、楽しみながらこのサロンを進化させている。

●奈良県内のサロン運営状況 市町村社協回答

ふれあいいきいきサロンの有無

あり 24 市町村域
(326カ所)

なし 15 市町村域

●社協が提唱する「協働の場」の例

地域に暮らす互いの力を出し合う「協働の場」は、地域の特徴や課題に合わせて、さまざまな形で展開されています。

見守り・支援活動

地域住民が要介護者を見守り、必要な支援を行う活動
ex.小地域ネットワーク活動

人間関係づくり活動

身近な場所で気軽に集い顔見知りになることで支え合いのつながりをつくる活動
ex.ふれあいいきいきサロン、子育てサロン、当事者組織活動、趣味サークル

生活支援

公的なサービスの対象とはならないニーズなどについて互いの支え合いで細かく対応する活動
ex.食事サービス、軽微な生活支援、移送サービス、住民参加型在宅福祉サービス